
私と“ 仮 ”家族の非日常。

しえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と“仮”家族の非日常。

【Nコード】

N2146F

【作者名】

しえる

【あらすじ】

主人公はごくごく平凡な女子高校生。しかしある日古本屋で見つけた真つ白な本を手にとって……。さあ、そこからが大変。おどおどした魔女さんとか自由人な狼男さんとか妖精さんとかと一緒に住むことにつ！？しかも両親は仕事へ海外へ行っているし……。さあ、主人公の非日常が始まりますっ！

プロローグ

「うにゃー」と体を伸ばした。

季節は秋。

高校一年生の私——草壁 ほのかものんびりとした人生を過ごしていました。

ん？

そうだ。

今は違うのだ。

私はのんびりとした人生を過ごそうとしてたの……が。
あいつらが来てから、私の人生はめちゃくちゃになっているの
でした……。

家のドアを開けて、ふと下のほうを見た。

「お、お帰りなさい」

正座してぺこつと頭を下げたのは、私の仮のお姉ちゃん。

草壁 菜緒だ。

いつもどおり、おどおどしている。

でも、それが男子にはよいらしく……。

結構人気はある。

まあ、顔も可愛いし、なんか守ってあげたくなるらしい。

「ただいま。今日は……大丈夫だったよね？」

私の言葉にお姉ちゃんはこくんとうなずいた。

私はその行動を信用し、リビングへのドアをあけた……。

「ただい……」

「おー。お帰りー」

私は「ん？」と固まったままその場に突っ立っていた。

ソファーにのんびりと寝転がっているのは私の仮のお兄ちゃん。

草壁 輝だ。

「ねえ？ お兄ちゃん？ あなたなにをやっているんですか？」

「なにつて……。テレビ見てる」

そう答えたお兄ちゃんの手元にはテレビのチャンネル。

そしてその先には跡形もなく部品が転がっている。

たぶんこれはテレビだろう……。

いや。正しくはテレビ“だったもの”。

ふるふると体が震える。

そしてその瞬間、私の怒りが爆発した。

「いい加減にしろおおおお！」

ブログ（後書き）

はじめまして。

まだまだ初心者の子えるといいます。

批評、感想などを書いていただけるととてもうれしいので…。

もしよかったら書いてください。

それでは、よろしく願いしますっ。

第一話 あなたは続きますか？

「んー……。なんかいい本ないかなあ？」

そう言いながら本の出し入れをする。

ここは駅前の古本屋。

安くて来るのが便利なので私のお気に入りのお店だ。

「ん？ なに……。これ？」

そうつぶやいて一冊の本を手にとる。

題名には「Mysterious story dedicated to you」と書いてある。

たぶん翻訳すると「あなたに捧げる不思議な物語」ってところかな？
わからないけど……。

ぺらつと一枚ページをめくってみる。

英文で書かれている……。

なんて書いてあるかわからないや。

そう思いながらページをめくっていると、不思議なことに途中から
なにも書いていない。

あわててどんどんページをめくる。

しかし、最終のページにもなにも書いてなかった。

「あの……」

カウンターにいつもいるおじいさんに声をかけようとしたが、どこにもいない。

あたりをきよろきよろと見回してみるが、誰もいない。
不気味なほど静かだ。

気味が悪くなりあわてて店から出ようと、あの本を本棚にいれようとしたが……。

不思議なことに本が手から離れない。

いや。手が本を離さないのだ。

自分の意志とは関係なく本をつかんでいる。

「いやっ！」

気味が悪い……。

私はあわてて走り出した。

必死に腕を振りながら、我が家をめざした……。

「はあはあ……」

息が荒い。

手はまだしっかりと本をつかんでいた。

「お母さんっ！ 助け……」

そう叫びながら家のドアを開ける。

しかし、お母さんがいるはずの家は静かだ。

なにかあったのかとあわててリビングへと走る。

「お母さんっ！？」

ばんつと勢いよくドアを開けた。

そして机の上には一通のメモがおいてある。
私はそれをバツととって隅々まで読み始めた。

“ えっとー。お父さんとお母さん急に海外で仕事が決まっちゃったのよ。本当はほのかも連れて行くはずだったんだけど……。携帯にも連絡つかないし、もう時間もないから行くわねえ。
しばらくは仕事が忙しいと思うし、一か月ぐらいしたら迎えに行くわね？ お金とかは銀行に預けてあるのをつかってね。決して無駄遣いしないのよ？ それじゃあ、つい tara 連絡するわねー”

なんともお気楽なメモだ。

私はその場に力が抜けたように座り込む。
そのとたん、手が本を離した。

「離……れた……」

私はふうと息を吐く。

本を手にとってページを開いた。

よし。今度は手の自由が利く。

一ページ目を見てみると、驚いた。

あの難しい英文が消え去り、代わりに別の言葉が書かれていたからだ。

“ 続きを書きますか？”

はあ……？

続きを書きますかって……。

どういこと……？

「むづ……。この契約者とりーい」

どこからか声が聞こえてくる。
私はきよろきよるとあたりを見回した。

「さあ。早く言いなさいよ。“書きます”ってさ」

えっ？ えっ？

いったいどこから声が……？

「もー。じゃあ、私が動かしちゃうからっ！」

その言葉が聞こえた瞬間、私の口が勝手に動いた。
あるとき、手が勝手に動いたのと同じ感覚だ。

「“書きま……す”」

最後、力をこめて言わないようにしたが、やはり逆らえないようだった。

「よっしゃ。契約完了っ」

その声とともに、本が光りだす。
本のページがばらばらとめくられる。
風もふいてないのに！
なんでっ！？

「んあー。ここか？ 新しい契約者の家って？」
「わわっ。待ってくださいっ！」

光がなくなっていく。

私はうつすらと目をあけた。

そしてそこにいたのは……。

頭の上に耳が生えていて、しっぽがある男の人。

どう見ても童話に出てきそうな魔法使いの女の人。

そんなわけのわからない人たちが私の目の前にいらっしやいました……。

第一話 あなたは続きを書きますか？（後書き）

うむむ…。

やっぱり変なところがたくさんですかね？

批評、感想ぜひぜひ待ってますので…。

よろしかったら書いてください。

第二話 現れたのは……変な人？

「なつ。なつ……」

私が座ったまま後ろにさがる。
なに……。こいつら。

とても眩しい光が消えて、現れたのは……。
童話にでてくるような人たち。

黒い魔女の洋服のようなものを着た女の人と、どう見ても狼男のような格好をしている人。

これは……。

かなり怪しいっ！ おまわりさん。助けてくださいーい。ここに変な人があ……。

「おい。その契約者！」

私はその声にはっとして男の人のほうを向いた。

“契約者”って……。なに？

「お前だろ？ 契約者って？」

「ち、違いますっ！ 契約者なんかじゃありません！」

私は必死に首を振った。

すると狼男……？ さんはやれやれというふうに首をふった。

「まあたキルトアは無理やり契約をさせたのか。まったく……。困ったヤツだ。なあ、ナオティット？」

そう言いながら狼男さんはふつと笑った。
すると狼男さんの後ろに隠れていた魔女さん——ナオティットさん？　がおどおどと姿を現す。

「そ、そうです……ね。でも、キルトアさんに逆らうと怖いですから……」

ふるふると体が細かく震えている。
私そんなにおびえさせるようなことしたかな……？

じゃなくて！

この状況をどうにかしないとっ。訳がわからないもの！

「あんたあ。私なんですって！？」

ナオティットさんがびくつと震えた。

すでに大きなぱっちりとした瞳には涙がたまっている。

「おいおい。今さら登場かよ……。キルトア」

狼男さんが苦笑いしながら言った。

そつえばこの声は聞き覚えがある。

無理やり「書きます」と言わされたときに……。

口調もまるでそっくりだ。

「しかたないでしょう？　契約者がいないと力が弱いんだからあ！」

ぽんつと出てきたのは可愛い妖精。

目がパッチリしてて、まるでこれは……。

まるっきり童話にでてくる妖精ではないか！

「あんたもいい加減ばーつとするのやめなさいよ！ まったく……。これだから人間は……」

少々今の言葉はぴきつときたぞ？
ていうか、急にあらわれてなんなの？
こいつら！

「あ、あなたたちなんなんですか！？ いい加減家から出ていってください！」

私はありったけの大きな声で言う。
するとキルトア？ ははあと溜息をついた。
どうやら呆れているようだ。

「いい？ あんたは私、キルトアと契約したの。つまりあんたは“語り人”になったのよ！」

ビシッと私に指をさす。
いや……。

まったく意味がわからないのですが。

「もう。物わかりが悪い人間ねえ。しかたないから最初から説明してあげるわっ！」

最初からそうすればいいのに……。
そう思っているとキルトアにぎつと睨まれた。

「いい？ まず、この本は途中までしか書かれていないのよ。それでね、この本は続きを書いてくれる人をまってるわけ。いや。正し

くは、この本の住人が終わりを願っているのよ」

「はあ。で、なんでその続きを書くのが私？」

「まあ、大人しく聞いてなさい。それでね、私はこの本の守護者。キルトアよ。で、こいつらが住人」

こ、こいつらって……。

キルトアの言葉に狼男さんは肩をすくめているしナオティットさんはおどおどしてるし……

だいがキルトアの行動には慣れているらしい。

別にこれが普通なようだ。

「で、さっきの話にもどると、あなたが選ばれたのはトルケットストーンを持っているからよ」

は……？

トルケットストーン？

なんですか？ それ？

「この本を完結させるためには必要なモノよ。それにそれが、私の力のようなモノだから……」

「でも、私そんなもの持っていないよ？」

「あなたの心の中にあるのよ」

そう言ってキルトアは私の胸をとんとついた。

その瞬間胸がぱあつとあたたくくなった。

これは……。いったい……？

「ね？ 言っただでしょ？ 反応してるのよ。トルケットストーンが……」

キルトアはそう言ってからぱっと手を離した。
私の胸ももとの体温にもどる。

「わかった？ これで」

私はこくんとうなずいた。
はつきり言つとわけのわからないところ微妙にあるけれど……。でも、たぶん大丈夫！

「それじゃあ、これからよろしくな。ちなみにおれの名前はヒカル。普通にヒカルって呼んでな？」

にかつと笑う狼男さん。
いや。ヒカル。

「わ、私はナオティットです……。えっと、私も好きに呼んでくれれば……」

そんなにおびえなくても……。そう思うぐらいにナオティットさんはおびえている。

「そして私がキルトアよ！」

なんか偉そう……。上から目線デスカ？

「それじゃあ、私は本の中にもどるけれど……。あんたらはしっかりと働きなさいよ？」

そう言ってキルトアはぽんつと消えた。
え？ こいつらは連れて行かないの？

「なー。人間。おれどこで寝ればいいー？」

「私、お風呂にはいりたいのですが……」

ん？

あれ？ おかしいなあ？

なんでこいつらはここに住む気まんまんなんだ？

「ちよっ！ 私の名前はほのかだよっ！ ていうか、あんたらまさか……」

私がわなわなとふるえる。

お願いだから予想通りにはならないでくれ。

「そ。おれたち今日からここに住むから。よろしくなー」

ナオティットがぺこつと頭を下げた。

私の怒りがマックスにたつした。

というかメーターをふりきった。

「お前ら本の中へ帰れええええ！」

これから私の日常は“非日常”へ変わっていきそうです……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2146f/>

私と“仮”家族の非日常。

2010年10月10日03時17分発行